



思いを

未来へつなぐ

若い特攻隊員は戦争が終わった後、日本の再建と発展を願っていた。この折りと願いを引き継いで、皆さんが彼らの分まで充実した人生を全うして欲しい」と知覧特攻平和会館の語り部、川床剛さんは、こう訴えた。

戦後65年が経過し、戦争を知らない世代が人口の約8割を占め、戦争の悲劇が年々風化してきている。

市では今夏、戦争の悲惨さを見つめ、平和の尊さを未来に語り継ぐために、相良史料館開館30周年記念特別企画展「戦争遺留品展」―ヒロシマ・ナガサキ原爆展―を開催した。戦争遺留品展では、市民の協力により、当時の遺留品や資料、知覧特攻平和会館から借用した資料を展示。ヒロシマ・ナガサキ原爆展では、広島平和祈念資料館などから提

供を受けた貴重な写真や記録映像などを展示、上映した。企画展の来場者数は延べ1800人を超え、多くの人の心に当時の様子を印象付けた。これらの展示に併せて、8月13日に相良総合センターいくらにおいて、「家庭と地域で子供を育てる市民のつどい」が開催され、鹿児島県南九州市にある知覧特攻平和会館の戦争体験の語り部である川床剛さんを招いての講演が行われた。

川床さんは「特攻隊員の心に学ぶ命の尊さと親子の絆」をテーマに講演し、約450人の来場者は、時折涙を浮かべながら、当時の話などを真剣に聞き入っていた。戦争は決して、繰り返されるべきものではない。そして、この歴史を未来へ語り継いでいくことが私たちの使命である。



1_戦争遺留品展にて、さまざまな遺留品を見学する市民 2_市民のつどいでは、市吹奏楽団の演奏に合わせて、合唱団「コールマリーン」が「妻と兵隊」「上を向いて歩こう」の2曲を合唱した 3_少年兵の話や当時のエピソードなど資料を用いて伝える川床さん

戦争の悲劇を決して忘れてはならない



戦争遺留品展

8月1日から8月15日まで相良史料館で開催された。展示品は、軍服や寄せ書きされた日章旗、遺書、軍刀、歩兵銃など、市民ら約35人から寄せられた戦中、戦後の遺留品や当時の資料など約250点。中には、飛行機の本製燃料補助タンクや水上偵察機のプロペラなど多彩なものもあった。